

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 12 月 4 日現在

機関番号：30119

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520229

研究課題名(和文) 図像と文学形成の関連についての基礎的研究 伝承をビジュアルターンの視点で見直す

研究課題名(英文) A basic study on the relationship between images and the formation of legends

研究代表者

林 晃平 (HAYASHI, Kohei)

苫小牧駒澤大学・国際文化学部・教授

研究者番号：70156438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本における主要な亀趺と龍宮門の調査をしリストを作成した。これにより龍宮門と亀趺の日本における概数と所在が確認できた。それをもとに亀趺については論文を2本作成し、十七世紀の亀趺の初期の展開、及び近隣諸国の亀趺の形状を中心に比較をし、考察した。これらにより日本の亀趺の形状の特異性と特徴が明確になった。文学とイメージに関する考察では研究発表を行い、地域こそ違え亀趺が同じような伝説を各地に生み出し、特に松江市の月照寺の亀趺は人食い亀伝説を出現させている。以上、龍宮門については、そのイメージの特徴と伝承の経路が一段と鮮明になり、亀趺に関しては、図像が文学を生み出す機構と関係が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：I compiled a list of major kihu and ryugu-mon in Japan. The study revealed the rough number of Japanese kihu and ryugu-mon and their locations. I then wrote two articles on kihu in which I discussed the original spread of the turtle-shaped pedestals during the 17th century and compared the shapes of them with those from neighboring nations. In consequence, the original characteristics of Japanese pedestals were found. As for the relationship between literature and images, I found that the kihu pedestals had given birth to similar legends in many parts of Japan. In this regard, the kihu in the precincts in Gesshoji temple in Matsue, Shimane prefecture is noteworthy because it helped the birth of the legend of a ferocious turtle that was believed to eat people. From above, as for the ryugu-mon tower gates, their general architectural images and the passage of oral legends were more concrete. On the other hand, regarding kihu, it was more obvious that images triggered the birth of local literature.

研究分野：文学

キーワード：イメージ 伝説 亀趺 龍宮門

### 1. 研究開始当初の背景

当該研究者のライフワークとする浦島伝説の研究において、その近世的展開を明らかにするには龍宮門と蓑亀(亀趺の大半がこの異形の形状)のイメージ形成と展開過程の解明が欠かせない。しかしこれらに関する既存の研究は少なく、その成果も充分ではなかった。ゆえに二十年余、学会出張等を利用してその都度、現地およびその周辺で資料の確認を行ってきた。だが、年に数回程度の調査では全国に散在する資料のうちで確認できたものは極一部に過ぎず、旅費等の捻出にも限界があった。そこで研究の進展のために「図像と文学形成の関連についての基礎的研究」という課題に絞り、新たに科研費を得て研究の進展を図ったものである。

### 2. 研究の目的

一七世紀に入ると浦島太郎の訪問先は蓬莱から龍宮に替り、その往来方法も船から亀へと交替する。その要因は近世における情報伝達の変化にあると考える。これまでの研究成果から、印刷された絵入本の出現により、図像イメージの流布が盛んになり、蓑亀という神聖な亀が注目され、異国の門が龍宮の象徴として定着するという仮説を立て、その実証のための基礎的研究として、亀趺と龍宮門を全国調査し、その現状の把握と確認をすることで、具体的イメージを把握し直し、イメージと文学の関係の究明の糸口とする。

### 3. 研究の方法

- (1) 全国に分布する龍宮門と亀趺を現地に赴きその現状と関連資料を調査する。
- (2) それに基づき分布の現状を把握し、特に集中する地域を取り上げ、具体的にイメージがいかに伝承されていったかを考察する。
- (3) 全国の中からイメージ伝承の顕著な例を取り上げ周辺地域との関連を考察する。

### 4. 研究成果

#### (1) 亀趺について

亀趺という語は近世以前に定着していなかった。現存古辞書にも登載の例はない。最も早い用例として引用されていたものは、林羅山の撰するところの石碑銘文である。碑は江戸初期に下総古河の大名として没した永井直勝のためのもので、銘文を刻した亀趺の石碑は京都市の悲田院に現存する。一般に石碑は、台座である趺と碑身、そして碑身の上にある装飾部分の碑首の三部分に分けられる。趺が亀の形をしているものが亀趺。碑首に龍の類の彫物があるのが螭首と呼ばれる。悲田院にある永井亀趺には、加えて余り類例の少ない螭首の上にアーチ形の笠が付いた碑である。この笠は、初期の亀趺碑五例にのみ見られる特徴である。この笠を除くと碑身と一体になった半円形の所謂螭首をもったものである。これは『訓蒙図彙』に掲載イメージに近い(以下に掲示の図版・『訓蒙図彙大成』挿絵を参照)。注目すべきはその亀の形状である。京都市



『訓蒙図彙大成』巻十一・器用・石碑

の金戒光明寺の石川吉信の亀趺や類似の他のそれが首をすくめた平たい亀であるのに対して、東大阪市の山口重信の亀趺の亀は首を少し持ち上げた全体に丸みのある亀で、その頭部は亀というよりは鼠のような顔をしているのである。それは耳があり、口の左右に牙があり、尻尾も異なる。石川亀趺らの尾は太くその先は左に曲がっているが、山口亀趺には尾が見受けられない。替わりに、筆か刷毛のような蓑毛が真ん中から左右に分かれてなびいているのである。こうした耳や牙を持ち蓑毛の尾を持つ、特徴ある異形の亀を、当時においては蓑亀(緑毛亀)と呼んでいた。これは既に『訓蒙図彙』や『和漢三才図会』にも、その図像が収録されており確認することができる。問題となるのは、『訓蒙図彙』に描かれた亀趺の亀とその頃に建立された京都周辺に現存する亀趺との形状の違いである。

『訓蒙図彙』に描かれた亀趺の亀は明かに蓑亀のイメージを具現化している。一方、石川亀趺などにはそれが見られない。では、そもそも『訓蒙図彙』の挿絵のイメージは何に由来するものであろうか。『訓蒙図彙』では、寛文版の挿絵に関して、凡例において「諸品の形状並びに茲邦の風俗土産に象る」とあり、掲載の図像は、日本国内のものはそれに基づいていると述べ、そのために「凡そ目撃する所の者は便ち筆して之を模す」と記す。実際に見たものはすべてその場で模写したというのである。しかし、

その形状は現存の京都周辺に残存する亀趺とは一致していないが、京を遠く離れた地である鹿児島県始良市にはこれによく似た亀趺が現存している。また、近年報告された金沢市野田山の奥村永福の亀趺は、石川亀趺・永井亀趺や山口亀趺などのように既に笠があり、しかも江夏亀趺のように方穿を持っているが、残念ながら耳は見られない。しかし、その笠を取り除けば、『訓蒙図彙』の図像イメージとなろう。大きさは異なるものの、加治木町の亀趺にかなり近い。また、石川亀趺を三年遡る石碑でもある。そうすると、現在の京都周辺に『訓蒙図彙』のイメージする現存亀趺がないからといって過去の存在を否定することはできないであろう。むしろこの奥村亀趺の存在が過去に存在した可能性を示唆するのである。

日本における亀趺は、当初は大名家の墓碑や墓前の顕彰碑（神道碑）として導入された。それには江戸初期の儒者の関与が背景にあった。しかし、寛文の頃にはそうした墓碑から単なる石碑としての独立傾向が見られた。そして、亀趺の亀の姿も蓑亀が通常となってきた。即ち、亀趺とは石碑の謂いであり、石碑は亀趺を伴うものとなっていたのである。ゆえに、墓碑や顕彰碑から逸脱しているいろいろな石碑にも亀趺碑が用いられ、転用されていったのである。

一方、海外の隣国に目を転じた場合、海彼の亀趺には中国と韓国の亀趺とが形状や形式的にも類似性が見られるのに対して、日本のものは意外に類似性が少ないことに気がつく。韓国と中国が陸続きである以外にも理由はあると考えるべきであろう。

中国における亀趺は、その歴史も古く残存異物も多くその形状も変化に富んでいる。特に頭部は特徴が甚だしく、清朝の亀趺は龍のような荒々しい顔のものが多い。こうした変遷はつとに知られているようで、泰安市の岱廟の展示室には、その特徴を一覧できる図が掲げられている。宋・金・元・明・清の各時代の亀趺頭部が側面から描写された絵で記されているのである。こうした亀趺の典型例を挙げるならば、南京市の明陵の碑がある。陵の入り口にあり風雨の影響を受けにくいようにしっかりと碑堂となる構造物によって守られている。頭部だけでなく尾も逆三角形上に彫られている。この形状は清代も類似している。なお、中国における亀趺は中華民国となっても作られていることが、その遺物が北京石刻博物館に収められていることから確認できる。

今日では中国的文化が顕著である台湾においては、不思議なことに亀趺はほとんど見られない。あるのは台南市にある赤嵌楼の前庭に横に並んだ九基と嘉義市の公園内の類似の一基などである。ただし、これらは、同時期の中国本土のものと比較すると亀の形状も異なり比較しても貧弱な感じを免れない。赤嵌楼のものは清朝の乾隆皇帝

がその碑文を作り、「御製」と碑額にも見られる。しかし、螭首は碑身と一体化した簡易なものであり、碑身も薄い板状で裏面は加工が施されていない粗いままである。亀趺の亀も中国本土とは大きく異なる耳のない平凡な川亀の形状をしている。おそらくこれまでに筆者が目にしてきたような北京、泰安、曲阜、西安、南京などに見られた共通する重厚な亀趺を知らない石工の手になるものであろう。ただし、現在台南市に残る亀趺以外の石碑は、それなりに重厚な碑身である。ゆえにその貧弱イメージの所以は未詳である。

韓国の亀趺にも千三百年以上に亘る歴史と変遷がある。現存最古のものは統一新羅時代のもので慶州市西岳里にある「太宗武烈王碑」（661年）である。武烈王碑は統一新羅初期の代表例であるが、残念ながら碑身は失われているが、亀趺と螭首は残っており、亀は首を斜上に伸ばし、口は閉じて、目は開かれていて、亀甲の周辺には唐草文が彫られている。近くには同時代のものが他にも二基残存する。新羅時代でも九世紀に入ると、亀の頭は直立し、螭首は冠形または蓋形に変化する。「月光寺円朗禅師塔碑」（890年）が国立中央博物館に現存し、形式も亀の形状も大きく変遷している。高麗時代の例としては国立中央博物館の前庭に移設された「菩提寺大鏡大師塔碑」（938年）があり、新羅式を踏襲したものというが、既に中国のものとは似ても似つかない。李朝時代の石碑は中国の唐・宋以来の中国の形式に戻った感じがあるが、ソウル市に現存する「円覚寺碑」（1471年）は、碑身・亀趺ともに細部や彫刻は李朝的といえる。

こうした隣国との比較を通してわかることは、日本の亀趺のイメージの規範となったものが、海の向こうから来たものではないことである。しかし、これまで見てきたように一七世紀前半に多い首をすくめた亀は、中国にも見られないし、韓国にも今のところない。形式は海彼に起源を持つものといえども、細微のイメージの根源は今のところ未詳というしかない。そして、日本では一七世紀後半には蓑亀という独自の規範を持った亀趺が確立したと思われる。日本における亀趺は平成に入った今日でもなお建立が続いている。例を挙げれば、武蔵野市の吉祥院に二基や八代市の八代神社（妙見宮）に一基等である。これらは日本の亀趺の特徴は備えていない。どちらも形式も形状からも舶来の亀趺である。文化の交流の進展は亀趺にも新しい時代を切り開いているというべきであろう。

こうした調査の過程で当初の目論見通り、亀趺のイメージが新たに伝説を生み出した例を確認することができた。鹿児島県、長崎県、山口県、兵庫県、福島県の各亀趺である。一般に文学は核となる出来事あるいは事象があり、それに感情を交えて言語に

置き換えることによって成り立つ。それはイメージを以って形象化され、口頭あるいは文字化されて伝承されていく。しかし、イメージそのものが文学を生み出すという逆の場合もあるのである。具体的には異形の亀の台座が、その異形で巨大であることと、碑文が難解で長文であることと、伝説が付随してくるのである。長崎市の大音寺のそれは、碑文をすべて読み下すと亀が動き出すという。鹿児島県宮之城町の宗功寺跡墓地にある「祖先世功の碑」も、碑の文を一度も間違わずに読み上げたら亀が動き出して川内川の水を飲みに行く、また、姫路市の随願寺も、碑文を一字の誤りもなく読むと石碑の亀が動く、猪苗代町の猪苗代湖を望む土津霊神之碑の亀踏にもそれは見られる。亀踏の異形の亀に触発されて発生したこれらの伝説の成立は、当然ながら亀踏を持つ石碑が建立される江戸期以降である。そして、地域を異にするこれら五例に共通するのは、碑文を読むことで亀が動くことであるが、互いの影響関係は見出しがたい。しかし、こうした簡潔な伝説が松江市の月照寺の場合は些か異なっている。記録された例としては小泉八雲のエッセイのみであるが、夜な夜な亀が池で泳ぐので、亀の頸を折ることで鎮めたというという伝承は、二メートル近い巨大な亀踏の威圧感のため、人食い大亀を鎮めるために亀の石碑が建立されたという異伝すら持つ。そこに伝説から文学が成立していく過程を見るのである。この倒立した因果関係は、文学が単なることばや文字だけでなく、そこから紡ぎ出されるイメージを前提に説かれる場合があることを示しているといえる。以上から以下の結果が導き出される。

亀踏の全国的な分布の概要とその図像的イメージが確認できた。

近世初期を除き亀踏の大半は蓑亀であることが確認された。

近世初期からにわかに日本に出現する亀踏は同時代以前の近隣の諸国と比較しても類似のものが見られない。

鹿児島県宮之城、長崎市、松江市、姫路市、会津の亀踏は碑文を読むと動き出すという伝承を持つ。特に松江市の例は人食い亀の伝説に拡大していて、異形の亀のイメージが伝説を生み出していく好例といえる。これについては全国大学国語国文学会・第110回大会、「イメージは文学といかに関わるか 文学の発生に関する一私論」(2014年11月9日、弘前大学)として研究発表したものであり、今後の論文としても発表の予定である。

## (2) 龍宮門について

「龍宮門」は近世における印刷というマスメディアが生み出したイメージであり、その流れの中で形成されてきたと思われる。人間の想像力は、言語だけでなく画像という視覚的イメージをも活用して広がり、そ

して定着していく。さらにその視覚イメージは言語とは独立して別箇にも伝承されていくのである。明治三十年代に森鷗外が『玉篋兩浦嶼』で提示した画期的な龍宮は、彼の「自注」から一見独自龍宮のように思われる。しかし、異境的要素は既に近世後期の草双紙や錦絵などにより龍宮イメージが結実していた。鷗外の龍宮もこうした延長線上にあったというべきものなのである。

龍宮門という異形の門は、それゆえに人目をひき近隣に類似の門の建立を促す傾向がある。岩手県、栃木県、鳥取県などにその例が見られる。

## (3) まとめ

以上、今回の調査を通して、全国の龍宮門と亀踏の資料の残存状態を確認し、併せてイメージが新たに文学を生み出していく例とその過程が確認できたこととで、大きな成果が挙げられたことを簡略ながら報告する。近世という時代は、古活字版から製版へと移行し、書物はそれ以前とは格段の差で普及していく。画像も印刷というマスメディアにより一度に大量に頒布され、文字以上に直截的理解を促し、画像が文学を構成する重要な要素となってきた。その象徴となるべきものが龍宮造と呼ばれる楼門形式の「龍宮門」である。それは当初は異境・異国境表現の一つであり、中国の明・清朝の城門の建築形式であったが、草双紙などの絵入本の普及により、龍宮の門として定着していくのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

林晃平 「亀踏の生成と展開 日本における発生と展開」『苫小牧駒澤大学紀要』査読無、28、2014、1-23

林晃平 「日本における亀踏の類型覚書 中国・韓国の亀踏との比較を通して」『苫小牧駒澤大学紀要』査読無、29、2014、19-35

〔学会発表〕(計1件)

林晃平 全国大学国語国文学会・第百十回大会、「イメージは文学といかに関わるか 文学の発生に関する一私論」(2014年11月9日、弘前大学)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページに報告書を掲載している

<http://www.t-komazawa.ac.jp/pdf/24520229.pdf>

## 6. 研究組織

研究代表者

林 晃平 (HAYASHI Kohei)

苫小牧駒澤大学・国際文化学部・教授

研究者番号：70156438